

が等閑に附した方面を暗指する趣きである。わたしは「前編」で次のようにいった。

賀の作品中「秦王」の語を使用するのは「秦王飲酒」と「長歌續短歌」で、後者の秦王が唐の太宗であろうといふことは拙稿「唐の太宗」(『李晉研究』第五號)にのべた。「秦王飲酒」のそれも唐の太宗であろうことは、ほとんど動くまい。ただ、それはこの詩の發想の出発点においてのことであつて、成立した作品は、唐の太宗に限定されない、普遍的な「秦王」をうたつてゐる、とわたしは感じる。

なお、この時は氣づかなかつたが、陳本禮の『協律鉤元』は「秦王」に前秦の苻生を當ててゐる。さて、「秦王飲酒」の發想の出発点において「秦王」が唐の太宗であろうといふ推測は、唐の書述の『兩宗新記』(『唐代研究のしおり』第六所収)に引く太宗らの聯句によつて支えらるるだらう。

貞觀五年 太宗 突厥を破り、兩儀殿に於て突利可汗を宴し、七言詩柏梁體を賦す。

御製 絶域降附天下平 絶域 降附し 天下 平なり

神通曰 八表無事悅聖情 八表 無事 聖情 悦ぶ

無忌曰 雲披霧歛天地明 雲披け霧歛まつて 天地 明なり

元齡曰 登封日觀禪雲亭 登封して 日觀す 禪雲亭

蕭瑀曰 太常具禮方告成 太常 禮を具して 方に成るを告ぐ

宋の王應麟の『玉海』卷第一百五十九にも同文を載せ、『全唐詩』卷第一には作者をそれぞれ「帝」「淮安王」「長孫無忌」「房玄齡」「蕭瑀」と記す。なお「貞觀五年」は「貞觀四年」と

改めねはならぬ。

神通ら四臣の句は太宗の句を敷衍し、神通が「絶域」を、無忌が「降附」を、玄齡が「天下」を、蕭瑀が「平」を、分敢歌頌する。

この聯句全體が「秦王飲酒」のはじめの四句に酷似するが、さらに檢察すれば、太宗の句と「秦王飲酒」の初二句、神通のと三四句、無忌のと五―九句、玄齡のと十一―十三句、蕭瑀のと十四結句が對應する。

淮安王神通は、李賀の五世の祖の李壽、字は神通、であつた。賀がこの聯句に關心を抱かぬはずはない。見れば聯句の韻字は下平聲で、平・明が十二庚・情・成が十四清・序が十五青で、「秦王飲酒」第三乃至結句の韻字と共通する。では初二句の韻字の極・碧と聯句とどう關わるか。神通の敷衍する「絶域」の域字は入聲二十四職、すなわち「秦王騎虎遊八極」の極字と同韻である。絶字は十七薛で、同じ入聲ではあつても隔たるが、「劍光照空天自碧」の碧字もまた二十二昔で、極字と同じ入聲ながら隔る。

太宗の作に唱和する四人の順序は、當時の太宗の近臣としての序列を示すだらう。ところが、それから十三年後の貞觀十七年、太宗の建てた凌煙閣に、「降附天下平」を分説した三人は開國の功臣としてその圖を插かれるが、高祖李淵の起義にいちはやく呼應し、聯句で「絶域」を敷衍した神通は「功臣」の列に入らぬ。神通はあの聯句の年の十二月に世を去つてはいたが、

清の王曇は『煙霞萬古樓詩選』卷一の「五雲畫く所の大曹長公主像に題する作にいう「獨り偏師を將めて一軍に冠たり。入關の娘子は是れ功臣。凌煙閣上に名姓無し、寫すを闕く開唐の第

一人」。後代無縁の詩人にもこの感慨があるとすれば、神通の子孫の李賀に思いの無からうはずがない。「兩儀殿聯句」と「秦王飲酒」との、意味と押韻の両面での對應共通は、偶然ではなく意識しての追和だろう。共通するところが意識しての對應なら、共通せぬところもまた偶然ではなく、企畫計算されたものとせねばなるまい。

『舊唐書』高祖紀によれば、貞觀八年（六三〇）三月甲戌、高祖は西突厥の使者を兩儀殿に誦し、長孫無忌を顧みていう。

當今、豐夷盡服す。古へ未だ嘗て有らず。

無忌は千畝歳壽を<sup>奉</sup>上った。高祖は大いに悦び、酒を太宗に賜うた。太宗もまた觴を奉じ壽を上り、流涕していう。

百姓安きを獲、四夷咸く附するは、みな聖旨を奉遵せしのみ。豈に臣の力ならんや。

同じ歳、城西で觀兵式を行ったとき、高祖みずから臨視し、將兵を勞つて還り、未央宮で酒宴し、三品以上の者はみな侍した。高祖は突厥の諷利可汗に起つて舞うように命じ、また南越の酋長馮智戴に詩を詠じさせた。おわると笑つていう「胡・越、一家となる。古へより未だこれ有らざるなり」。太宗が觴を奉じ壽を上つていう「臣つとに慈訓を蒙り、教ふるに文道を以てす。ここに義旗に従ひ、京邑を平定す。……三數年の間に區宇を混一す。天慈崇寵、遂に重任を蒙る。いま上天祐けを垂れ、時和し歳阜に、被髮左衽、並びに臣妾となる。これ豈に臣の智力ならんや。みな上稟聖算に由る」。高祖は大悦びし。群臣みな萬歳と呼び、夜のはてるころ散會した。

高祖の武德九年（六二六）六月、秦王世民は兄の皇太子建成、弟の齊王元吉とその諸子を殺し

た。いわゆる玄武門の變である。高祖はやむなく世民を皇太子とし、八月、みずから太上皇と稱し、位を世民に譲った。世民が即ち太宗で、翌年が貞觀元年だ。四年（六三〇）の聯句は天子太宗の作に近臣李神通らが唱和した。神通は臣ではあるが、高祖の従弟だ。八年の兩儀殿に臨んだ高祖は、もとより太上皇としてであり、「當今蜜夷率服す、古へ未だ嘗て有らず」とは、「おれの時代にやれなかつたことを、息子はやりとげた」ということで、隱居から當主へのお世辭だが、長孫無忌を顧みていったのは、四年前に同じ場所であつた宴とそこの聯句をちゃんと知つていて、お前はそのとき「雲披霧歛天地明」と歌つたそうだが、するとさしずめおれは「雲霧」というところだな、との心も響かせている氣味である。玄武門の變の畫策者が無忌であり、その結果として高祖が退位し世民が天子となつた。このこともまた公然の祕密であつた。「千萬歳壽」を上るとき、さすがの無忌も汗びっしょりだつたらう。高祖の大いに悦んだのは、空ぞらしい「千萬歳壽」によりは、無忌の慌てように向けられたものであつたらう。太宗の「流涕」もまた、あの聯句が太上皇に及ぼした効果の思ひがけなさに氣づいたことに関するに違いない。

ついでながら森瀨氏が引く太宗の『鳳賦』は、『舊唐書』の「長孫無忌傳」には「威風賦」として引かれ、太宗の妻文德皇后の死すなわち外戚たる無忌の「權寵過盛」に對する世の非難を除くことを目的の一つとして作り、當の無忌に與えたもので、

明哲に憑つて禍散じ、英才に託して福全し。……賢徳の流殘をして、萬禁を畢ふるまで芳傳せん

とめでたく歌いあげるが、無忌の輔立するのちの高宗以外の、太宗の子で名望あるものは、ある

いけ殺されあるいけ遠ざけられる。明哲英才の無忌の計によって、太宗晩年の妻は、年は若くとも高宗にとつては庶母に當るが、高宗は太宗の死後、めとつてやがて皇后にする。武則天である。武則天は太宗の権力集中の方法をそっくり真似て、唐朝をいったん滅亡させる。武則天の老衰に乗じ中宗が復讐するが、「新唐書」の「武平一傳」によれば、その中宗は兩儀殿で宴し、胡の樂人たちに合生歌という流行歌を唱えさせて、ほしやまわる。「秦王飲酒」の佚樂を彷彿させる。

以上によつて、「秦王飲酒」が唐の太宗と幾重にも關することを確かめた。とはいつても「秦王」即太宗と限定し得ないことは、現に森瀨氏らのあげる諸説が太宗以外の帝王たちをこれに比定すること自體が物語っている。「秦王」を太宗とするのは、この詩の發想の出發點においてのことであつて、成立した作品は、唐の太宗に限定されない、普遍的な「秦王」をうたつていゝといふ所以である。

普遍的な「秦王」とは、それではいかなる者が、權力を集中して恣に行使する中國の王、森瀨氏のいう「世俗」王である。それをなぜ秦王といふのか。當時インドに對して中國を呼ぶとき、秦と稱することが多かったから。

では「秦王」と對する者として、李賀は何を心に描いたのか。インド即ち天竺より將來された佛經の説く「轉輪聖王」であつたらう。「秦王飲酒」中の「玻瓈」と「劫灰飛盡」がその鍵だ。

「劫灰飛盡」を佛經に尋ねたら「玻瓈」にぶつかり、「玻瓈」は日天子を呼び、日天子は轉輪聖王を尊き、天竺における世俗王の典型「轉輪聖王」の尊尊を佛經の描寫に見れば、自然にその

對蹠存在としての世俗王「秦王」に到達せざるを得ない。

五

「秦王飲酒」第四句に「劫灰飛盡」の語がみえる。吳正子の注にいう。

三輔黃圖に云ふ。漢武初めて昆明池を穿ち黑土を得。以て東方朔に問ふ。朔對へて曰く「臣  
愚。以て此を知るに足らず。西域の胡人に問ふべし」と。胡人曰く「これ劫燒の餘灰なり」と。  
以來、注家も評家もこれを襲ふ。とこ<sup>ろ</sup>で清の孫星衍・莊逵吉校正「三輔黃圖」の孫氏の序に

よれば、「三輔黃圖」は『隋書』の經籍志に始めて見え、魏・晉の書にその名を引くが、現に流  
布する本は後人が諸書からの記事を亂入増廣したもの。疑わしいものを刪去した孫氏らの本には  
吳注に引く記事は見えない。張澍編「三輔故事」に「武帝初穿池、得黑土、帝問東方朔、朔曰、  
西域胡人知之、乃問胡人、胡人曰、劫燒之餘灰也」と、酷似する記事を掲げ、出典を「藝文類聚」  
と注するが、汪紹楹校點「藝文類聚」には見えないようだ。「三輔故事」もまた「隋書」に始め  
て見える。すなわち、吳注に引く記事が李賀の「劫灰」の典故であつたと定めるには疑いを行す  
る。

もっとも、梁の釋僧祐の編輯した「弘明集」(四部叢刊)卷二に收める宋の宗炳の「明佛論」  
に「東方朔が漢武に對へし劫燒の説」の語が見えるので、その頃すでにこの種の説話のあつたこ  
とは確かだが、宗炳は出典を示さない。

梁の譯慧皎の『高僧傳』(大正新脩大藏經第五十冊)卷一の「三法蘭二」にいう。

昔、漢武、昆明池を穿ち、底に黑矢を得たり。以て東方朔に問ふ。朔云ふ「委くせず。西域の人に問ふべし」と。後、法蘭すてに至る。衆人、追ひて以て之を問ふ。蘭云ふ「世界終盡するとき劫火洞焼す。この灰は是なり」と。朔の言、徵あり。信する者はなほだ多し。

三法蘭は中天竺の人で、後漢の明帝の永平十年(ハキセ)あるいは十八年(ハキ五)に洛陽に來た、といわれる。

『高僧傳』は『明佛論』より約半世紀おくれる。いまの『三輔遺圖』あるいは『三輔故事』に見えるような記事が、宋以前の『三輔遺圖』にあつて宗炳も慧皎もそれに據つたのか、あるいは『高僧傳』の記事を前略し法蘭を「胡人」としたのが、今の『三輔遺圖』ないし『三輔故事』の記事なのだろうか。

李賀が『博伽經』を撰玩したことは確かだ。その譯者について記す唐の釋道宣の『續高僧傳』を讀んだらうことを拙稿「管輅流支傳と李賀小傳」(『李賀研究』第九號)で述べた。佛教思想を基盤とし作詩した詩人は王維以外に列を見ないと斷言する人もいるが、中國の詩人たちがそれほど偏狹で佛教思想がそれほど差刀に乏しかったとは、考之難い。唐の代の長安・洛陽の佛寺は、在俗の官吏やその豫備といふべき知識人に住居を提供し、僧院に備える經典は、それら詩人文女讀むことを許していたので、惡習を深め知識を廣めようとする人たちは、儒教にはない奇異莊嚴な言語宇宙を、そこに求め樂しんだ。ただかれらは復た知見がいかにも博大幽深であつてし、それを盡く詩文に露呈することば卑しんだから、微香によつて味識せめかぎりその堂奥は見えないの

だろ。李賀は『高僧傳』もまた讀んだはずで、『金銅仙人詩漢歌』と『高僧傳』の次の二つの説話との類似がそれを示唆する。

卷六「釋遷遠」にいう。

昔、潯陽の陶侃、廣州を經鎮す。漁人ありて海中に神光を見る。毎夕翫發し、旬を経て彌いよ盛なり。怪みて以て侃に白す。侃往きて詳視すれば、乃ちこれ阿育王の像なり。即ち接歸して武昌の寒溪寺に送る。寺主僧珍、嘗て夏口に往き、夜、夢に寺の火に遭ひてこの像屋ひとり龍神の圍繞するあり。珍、覺めて馳せて寺に還る。寺すでに灰盡してただ像屋存す。侃のち移鎮するに、像に威靈あるを以て、使を遣して迎接す。數十人これを擧げて水に至り、船に上すに及び、船また覆没す。使者、懼れて之を反し、竟に獲る能はず。

卷二「釋曇無讖七」にいう。

河西王沮渠蒙遜、涼土を僭據し、自う稱して王と爲る。……承玄二年、蒙遜、河を濟つて乞伏慕末を拘罕に伐ち、世子の興國を以て前驅と爲す。末軍に敗られ、興國、擒へらる。……興國、遂に亂兵に殺さる。遜、大いに怒り謂へらく、佛に事ふるも懲なし、と。即ち沙門の五十已下なるを遣斥し、みづ道を罷めしむ。蒙遜、先に母の爲に丈六の石像を造る。像、遂に泣涕して涙を流す。

ナキに拙稿「金銅仙人詩漢歌」で述べたように、賀は魏の魚豢の『魏略』や晋の習鑿齒の『漢晉春秋』などの傳える銅仙説話によつてあの歌を作つたのだらうが、右の『高僧傳』の二説話を併せて参考としたらう。ことに後者の石像流涙は、賀の銅仙鉛淚を誘發したものと察せられる。

「劫灰」も「高僧傳」に據つたと考文て不自然ではない。

「劫灰」が世界終盡するときの劫火洞焼の餘燼だとすれば、「劫灰飛盡古今平」の句を解くために、劫盡の典故を佛經に求めめわけにはけくまい。森瀨氏は怠らずに『大智度論』を引く。ただ摘取された語は、論旨にとって必ずしも妥帖ではない。また『大智度論』は佛敎の津梁、説話の寶庫だが、注釋だから、源泉を求めるには經藏に溯らねばなるまい。

『佛說長阿含經』(大正新脩大藏經第一冊)は、五世紀のはじめに北天竺罽賓國出身の僧で、李羅什の師であつた佛陀耶舎が、後秦の都の長安で、涼州の僧の竺佛念と共に譯出したもので、同時代の釋僧肇の序にいう。

阿舎曰秦の言の法歸。法歸とは、蓋しこれ萬善の淵府、總持の林苑。其の典たるや、淵博弘富、鑿みて彌いよ廣く、明かに禍福賢愚の迹を宣べ、眞偽異齊の標を剖判し、古今成敗の數墟域二儀品物の倫を歴記し、道として由らざる無く、法として在らざる無し。彼の巨海の百川の歸する所なるに譬ふ。故に法歸を以て名と爲す。

「二儀」はサキの殿名「兩儀」と同じく天地をいう。さて『阿舎』は小乘經典だが、それだけに佛敎の原始に近い敎説・習俗・神話・傳説等を保存し、大乘の經論もそこに基礎を置くものであることはいうまでもない。その『長阿含經』卷二十一、第四分世記經三災品第九にいう。

佛、比丘に告ぐ。四事の長久無量無限なるあり。日月歲數を以て稱計すべからざるなり。

この長久無量無限なる時間を劫という。サンスクリットの Kalpa だ。四事は四劫ともいい、世界が成立と破壊とを繰り返して循環する四時期である。

云何が四と爲す。一は世間に災の漸く起つて此の世を壊らんとする時。……二は此の世間の壊れ已つて、中間空曠、世間あるなし。……三は天地初めて起つて成らんとする時。……四は天地成り已つて、久住不壊。

一を壞劫、二を空劫、三を成劫、四を住劫という。

世に三災あり。云何が三と爲す。一は火災、二は水災、三は風災。……火災はじめて起らんとする時、此の世間の人みな正法を行す。……身壞れ命終つて光音天に生ず。是の時、地獄の衆生、罪畢り命終つて人間に來生す。……此の因縁によつて地獄道盡く。まづ地獄道盡き然るのち畜生道盡く。……梵天盡き已つて然るのち人盡き遺餘あるなし。人盡き餘すなくなり已つて、此の世の敗壞すなほ成ずるを災と爲す。そののち天降雨せず。百穀草木自然に枯死す。佛、比丘に告ぐ。是を以て當に知るべし。一切行は無常、變易朽壞し、恃怙すべからざるを。有爲の諸法は甚だ厭患すべし。當に度世解脱の道を求むべし、と。

では、火災はどのような経過をたどるのか。  
そののち久々にして、大黒風の暴起し大海水を吹くあり。海水の深さ八萬四千由旬、吹いて兩つに披かじめ、日宮殿を取り、須彌山の半ばに置く。地を去ること四萬二千由旬、日道中に安く。これに緣つて世間に二日出づるあり。二日出で已つて、此の世間のあらゆる小河、沃澆、渠流をしてみな悉く乾竭せしむ。

由旬は Yojana の音譯で、帝王が一日に行軍する距離とされ、一由旬は七、八キロメートルにあたるらしい。須彌山は Sumeru の音譯で、世間の中心、大海の中の金輪の上であり、高さ八萬由旬

九山八海がとりまき、その周圍を日月がめぐり、六道・諸天がそのまわりであり、頂上に帝釋天の住む宮殿があるという。

そののち久久にして、大黒風の暴起するあり。海水、深さ八萬二千由旬、吹いて兩フに披かじめ、日宮殿を取り、須彌山の半ばに置く。地を去ること四萬二千由旬、日道中に安く。これに縁り世間に三日出づるあり、三日出で已って、此の諸大水・恒河・耶婆那河・阿夷羅婆提河・阿摩佉河・辛陀河・故舍河けみな悉く乾竭し遺餘あるなし。

かくて四日出て泉源淵池みな乾竭し、五日出て海水涸れ盡し、六日出て諸山大山須彌山玉みな烟起焦燃し、七日出て諸山はもとより四天王宮・切鞞天宮・炎摩天宮・兜率天宮・化自在天宮・他化自在天宮・梵天宮みな洞然と全境し、風は火焰を吹いて光音天に至り、四天下みな洞然となり

此の四天下ないし梵天の火の洞然となり已り、そのうち大地と須彌山ごとく灰燼なし。これが劫灰飛盡である。水災・風災は省略する。四劫・三災の、これがたぶん佛經における原型で、同じ一長阿含にも、中阿含にも、他の諸經にも、部分を變形して頻出し、論部諸典ではこれらをまとめ、體系化に向う。その推移を眺めるのはまた一箇の樂しみだが、いまは「秦王飲酒」に絞る。

卷二十二第四分世記經世本緣品第十二にいう。

火災過ぎ已り、此の世の天地また成せんと欲する時、……此の世變じて大水と成り、周邊彌滿す。爾の時に藍って天下大闇、日月星辰晝夜あるなく、また歲月四時の數なし、そののち

此の世また變ぜんと欲する時、餘の衆生、福盡き行盡き命盡き、尤音天より命終して此の間に來生するあり、みな悉く化生にして歡喜を食と爲し、身光自照し神足空を飛ぶ。安樂無礙にて久しく此の間に住す。爾の時、男女尊卑上下なく、また異名なし、衆ともに世に生く。故に衆生と名づく。

衆生のなかに、地から湧き出るものを手にとって食べその味を知る者があり、食善を生じるようになり、「衆生の身體は蠱海となり光明はうたた滅し、また神足なく飛行する能はず」。その時にも日月はない。後ひさしくして大暴風が起り、大海水をおしひらき日宮殿を飄取し、須彌の半ばに置き日の軌道にのせる。

東より出で西に没し、天下を周旋す。第二日宮、東より出で西に没す。時に衆生言ふあり。是れ即ち昨日なりと。或は言ふ昨日に非すと。第三日宮、須彌山を繞り、東に出で西に没す。かの時、衆生言ふ、定めて是れ一日なりと。……日に二義あり。一に曰く常住度、二に曰く宮殿。宮殿は四方遠見す、故に圓し。寒溫和適。天金の所成にして、頗梨間廁し二分なり。天金は純眞無雜、外内清徹にして、光明遠く照す。一分は頗梨にして純眞無雜、外内清徹にして、光明遠く照す。

明の姚佺が『李長吉集句解定本』で『起世經』を引き、王琦の注がこれをうけず法苑珠林に載せる同經の文を引くが、『起世經』は傳來が明らかでない。「世記經」よりは後出の、しかし同系の經なのだろう。趣旨はほぼ同じだが、文の生動において著しく劣る。

頗梨は中村元『佛教語大辭』にいう「玻璃 sphatikaの音寫。もとほ水晶を意味し、轉じてか

ラスを意味した」。書寫だから玻璃・玻璃等の漢字が當てられる。「秦王飲酒」では北宋本だけが「玻璃」とし、他本はみな「玻瓈」とする。「瓈」は文字としては誤りで「瓈」が正しい。ただ梨と同じだから、「長阿含」を読んだとき印家に焼きついた「瓈梨」の字面が李賀の記憶中で部分を変化し「秦王飲酒」を制作するとき「玻璃」となって表出されたと考えられなくはない。単純な誤記ないし誤寫と見られやすいこの文字が、賀のこの詩の典故の一つを確定する重要な鍵であり、北宋本のテキストとしての優秀を證する一要約といえようか。

近現代の評注家は姚氏らが玻璃についてせっかく指摘してくれた佛典との關聯を熟視する勞を省いて「羲和蔽日玻璃聲」を感性轉位の小器用な譬喩としか見ない傾きがある。もとよりそのような見方をも容れる新奇を表面に混入するのが賀の詩の長所だが、根柢に古典を据える傳統手法を忘れていない。当座の思いつき程度のものが千年の歳月に漂たづなされてなお鋭く人の心を衝きうるだろうか。

## 六

前節に引いた文に續いて、

金牆銀門、銀牆金門、琉璃牆水精門、水精牆琉璃門、赤珠欄馬磁枕、馬磁欄赤珠枕、  
李賀の最も華麗な詩の字面を思わせる日宮殿細部の描寫が繰りひろげられる。そうして  
日天子自身、光を放って金殿を照し、金殿の光は日宮を照し、日宮の光、出でて四天下を照

す。日天子の壽は天の五百歳。子孫相承けて間異あるなし。その宮は壞れずして一劫を終ふ。日宮行く時、その日天子に行く意あるなし。言ふに我が行住、常に五欲を以て自ら相娛樂す。是と。日宮行く時、無數百千の諸大神、前に在りて導従す。歡樂倦むなく捷疾を好樂す。是に因つて日天子を名づけて捷疾と爲す。日天子、身より千光を出だし、五百光は下照し、五百光は傍照す。斯れ宿業功德に由るが故に此の千光あり。

右の「常に五欲を以て」、原文は「以常五欲」だが、月天子の相當部分で「常以五欲」とするので、これに従つた。

さてその宿業功德とは、不殺生、不盜、不邪淫、不兩舌、惡口、妄言、綺語、不貪取、不瞋恚、邪見の十種で十善とよばれる。月天子についてもほとんと同じ説明があり、同じく十善の宿業功德によつて月天子と生れ得たという。次いで、君主の起原が語られる。

衆生の間に生じた欲望はやがて財物田宅の私有ひいてはその爭奪に進み、諍訟怨讐を生じるが解決する者がいない。そこで衆生がいう。

我等いま寧ろ一平等主を立て、善く人民を護り、善を尊し惡を罰せしめ、我等衆人は各おの共に減割して以て之に供給すべし」と。

かくて衆中の威徳ある一人が選ばれ、是に於て始めて民主の名あり。

民主の十七世の孫が善見で、さらに十四世の孫が善思だ。

善思より已來、十族の轉輪聖王あつて相續絶えず。

「長阿含經」には「轉輪聖王」を標題に掲げるものが二つある。その一は卷六第二分轉輪聖王修行經で、二は卷十八第四分世記經轉輪聖王品第三だ。聖王品にいう。

佛、比丘に告ぐ。世間に轉輪聖王ありて、七寶を成就し、四神徳あり。云何が轉輪聖王の七寶を成就するや。一は金輪寶、二は白象寶、三は紺馬寶、四は神珠寶、五は玉女寶、六は居士寶、七は主兵寶。

金輪は天匠の造る所で、輪徑一丈四尺、千輻ありて、聖王の前に出現する。これによつて轉輪聖王といふのだ。聖王が金輪に「東に往け」といふと、金輪は四神に導かれて東轉する。聖王と四兵が隨行し、金輪の住するところを駕を止めると、東方の諸小國王が貢物を捧げて來ていふ。ただ願はくは聖王よ、ここに於て治政せられよ。

聖王が答ふる。

止めよ止めよ、諸賢。ただ當に正法を以て治化して、偷狂ならしむる勿れ。國內をして非法の行あらしむるなかれ。身、殺生せず、人をして殺生・偷盜・邪淫・兩舌・惡口・妄言・綺語・貪取・嫉妬・邪見せざるの人たらしめよ。これ即ち名づけて我の治むる所と爲す。こゝして聖王は金輪に導かれて南にゆき、西にゆき、北にゆく。またこの世界の林水清淨平廣の處に金輪が東西十二由旬、南北十由旬の地を劃すると、天神が中夜に城廓を造り、七重の欄楯七重の羅網、七重によつて、七重にめぐらされ、それらは七寶によつて飾られ、無數の衆鳥が和鳴する。城廓が完成すると、金輪は城中に東西四由旬、南北二由旬の地を劃し、天神が中夜に宮殿を作る。宮牆は七重の七寶より成り、無數の衆鳥が和鳴する。時に金輪は宮殿上の虚空中に住